

新しい生活様式の中でのST

平素より、貴センターのSTサポートプロジェクトによる、セミナー並びに講演会の開催にご尽力を賜り、厚く御礼申し上げます。

コロナで世の中のすべてが変わり始めて1年。私たち言語聴覚士(ST)の業務も、当然のことながらこれまでと全く違ったやり方を考えざるを得なくなり、当初は無力感さえ感じることがありました。ですが、ST本来の「聴く」「話す」「食べる」「考える」ことをサポートし、コミュニケーションを豊かにする役割を果たすべく、それぞれの職場で毎日奮闘しています。

STが勤務する職場は、医療や福祉、介護や教育機関など様々です。さらに成人や小児など対象とする方も違います。しかし、どの職場にも共通するのは「密」であることです。口の中を診る、耳や顔に触れる、話す、いずれも顔を突き合わせ、接触や飛沫を浴びることが避けられません。昨年の緊急事態宣言発令時は、特に小児では対応が困難なことが多く、どの療育現場もストップしました。私が勤めるこども病院でも、在籍する耳鼻科では手術ができなくなり、一日の患者数を制限せざるを得ませんでした。しかし、2回目の緊急事態宣言が発令された現在、どの現場もすべて稼働し、通常通りの勤務を行っています。なかには、PPE(Personal Protective Equipment 個人防護具)を装着し、コロナ対応を行っているSTもいます。一人一人のSTが、アルコール消毒や換気、飛沫対策など感染防止対策に取り組みながら日々の業務を行っています。患者さんを守り、自身や家族、スタッフを守るために緊張の毎日が続きますが、患者さんと共に歩んでいくためには、私たちSTも進んでいかなければいけません。

福岡県言語聴覚士会(県士会)でも、この一年は会として会員のために何ができるのか考えさせられた年でしたが、オンライン研修などようやく形になることが増えました。新しい生活様式の中でSTとして更なる発展を目指していきたいと思ひます。

福岡県言語聴覚士会 副会長

原田 恭子



毎年アクロスで開催していた言語聴覚の日のイベントです。いつかまた、こんな日が来ますように。

人文科学研究院附属 言語運用総合研究センター

スタッフの紹介

園迫 雅彦 (専門研究員)

当センターではセミナーの運営やホームページの管理などを行っています。研究の専門分野は幼児の母語獲得で、特に日本語の格助詞に関心があり、発話データベース(CHILDES)を用いたり、保育園などで調査をしています。

増田 正彦 (専門研究員)

専門分野は音韻論・音声学で、特に中国語方言(上海とその周辺で話されている方言)を対象として、声調に関わる現象などを研究しています。言語聴覚士や日本語教師の養成課程で音声学などの授業を受け持つこともしています。

山本 将司 (テクニカルスタッフ)

現在、人文科学研究院所属のテクニカルスタッフをしています。専門は統語論、特に疑問詞疑問文に注目して通言語的性質を研究しています。疑問詞疑問文は言語間差異が大きく、英語、ドイツ語、イタリア語間で対照研究を行っています。

令和2年度に実施したセミナー

言語聴覚士セミナー

開催日 令和3年2月28日

講師 入山 満恵子先生
(新潟大学)

テーマ 学習言語の評価と指導



日本語教師セミナー

開催日 令和3年3月14日

講演①
講師 峯松 信明先生(東京大学)

テーマ OJAD(Online Japanese Accent Dictionary)とそれを用いた音声指導

講演②
講師 峯松 信明先生(東京大学)
西村 多寿子先生(東京大学)

テーマ 音声情報処理技術を用いた言語学習・獲得支援

Center for the Study of Language Performance

発行日 令和3年 3月24日 発行者 静永 健

編集発行 九州大学大学院人文科学研究院附属 言語運用総合研究センター
〒819-0395 福岡市西区元岡744 [TEL・FAX] 092-802-5104 [URL] https://www.2lit.kyushu-u.ac.jp/~cslp/

印刷 城島印刷株式会社
〒810-0012 福岡市中央区白金2-9-6 [TEL] 092-531-7102 [FAX] 092-524-4411

言総研ってなに?

九州大学大学院人文科学研究院附属言語運用総合研究センターのことです。「ことば」に携わる方々と大学とをつなぐ架け橋になることを目指しており、現在、主に次の3種類の職業を意識して講演会やセミナーのテーマを設定しています。

- 言語聴覚士
- 中学・高校等の国語科の教員
- 日本語教師



大学の研究を教育・医療の現場へ

言総研通信

Vol.1

研究の現場と、教育・医療の現場を結ぶ。

みなさん、こんにちは。

私ども九州大学大学院人文科学研究院には、このように言語運用総合研究センターという附属組織があります。略して「言総研」です。

この組織は、人文科学研究院の20数種に分かれる講座の教員、学生、そして将来の研究が期待される大学院生や専門研究員と連携し、そのさまざまな研究成果を、中学・高校教諭など教育の現場の方々、また、言語聴覚士など医療現場で働いておられる方々にお伝えし、またそのほか幾つかの活動を通じて、情報の交換や、なごやかに実り豊かな交流の場を提供するために設立されたものです。スタートは2003年のことでした。

人間によるさまざまな営みを科学的に解明するためには、何よりもまず「ことば」を考えることから始めなければなりません。話されることば、耳にきこえることば、目でよむことば、そして、それら以外の、ありとあらゆるものから溢れ出てくることば、また、古い過去にさかのぼり、あるいは遠い彼方のひとつひとつからも、ことばは伝わってきます。それらの深遠で、この上なくいとおしいことばの科学を、みなさんと一緒に、これからずっと、考えつづける場を持ち続けたいと思います。

さて、この「言総研通信」は、以上のような研究と実践の双方の活動を結ぶため、やむにやまれぬ気持ちで創刊しました。創刊号に印刷された「2020年度」という数字が、いったい何を意味するのか。「へえ、そんな大変なときだったんだあ…」と後世の人たちから言われる時代が少しでも早く来てくれることを祈っています。

今回は、人文科学研究院にお招きしている特定プロジェクト教員(昔の招聘外国人教師)の方々からお二人の先生に、そして福岡県言語聴覚士会から原田副会長にご寄稿いただきました。ご感想を当センターのホームページなどにお寄せいただけると幸いです。

2021.2.12

九州大学大学院人文科学研究院 中国文学講座教授
附属言語運用総合研究センター長

静永 健



コロナ禍での
「ソーシャルディスタンス」が求められる学習

言語教育の オンライン活用授業法

九州大学文学部英語学・英文学研究室に所属して今年で3年となりました。私は現在、主に談話や用法基盤の観点から見た言語と文法に関するクラスと、それに並行して英会話、英作文のクラスを担当しています。本学の学生の多くは優秀で教えがいがある学生ですが、その一方で、積極的に授業に参加する姿勢が不足していると感じることがあります。特に教員、学生がともに積極的に活動することが授業の活性化を保つために欠かせない英会話のクラスでその傾向が顕著にみられます。特にソーシャルディスタンスが求められる昨今、学生を英会話の授業に積極的に参加させることは大変骨が折れる課題です。しかしながら、オンラインによる遠隔授業は、リアルタイムに対面式授業を行う方法として直接の対面授業には敵いませんが、言語教育の有効な手法となりうるものです。それらの手法として、オンラインの「面接」や様々な表現媒体を用いたプレゼンテーションなどがあります。

「面接」という言葉を耳にした時、多くの学生は不安感を抱きます。なぜかという、多くの学生が面接といえば自分一人で受け答えしなければならぬ就職活動での面接のようなものを思い浮かべてしまうからです。ここで問題となるのは、ほとんどの学生が「面接」はとにかく厳格で、全てにおいて窮屈なものだという考えに縛られてしまっていることです。それに対して、オンライン上での「面接」は単に一对一の会話形式のひとつにすぎないと思って構いません。授業を履修している学生の人数により、一度に何人の学生と面談するかは状況に応じて調節します。例えば私の授業では、20分の区切り毎に学生を分配します。一つの区切りで1人なら一時間で3人、私なら、上限は4人までとし、一時間で最大12人となります。従って、30人のクラスだと全員と面談するのに二時間半を要することになります。この活動を一学期に2回行えば、学生が教員と会話を行う十分な時間を確保できます。また、面接の題材を事前に決めても良いと思いますが、その場で即興で決めても良いと思います。これに関しては教員の腕の見せどころではないでしょうか。このような「面接」はまさに相互的な活動であり、積極的な会話が不可欠な活動となります。もちろん、このように面談を中心



九州大学大学院人文科学研究院
英語学・英文学講座准教授

エドムンド・クルーズ・ルーナ

Edmundo Cruz Luna

として授業活動を行うことは学生自身の能力も要求されますし、その学期に学生と何ができるのか判断できるのは教員だけです。

英会話の授業に用いる表現方法は様々ですが、私が言いたいことの一つは「目新しさ」を大いに盛り込んでいくべきだということでしょう。本当に重要なことは授業内で提示することに実内容が伴っているかですが。教員として、スライドに文字を詰め込む癖はやめなければいけません。そうではなく、流れるようなスライドを作成すべきです。そして、ビデオや音声ファイルをはじめとする複数の媒体を使いこなす能力も必要です。これらの媒体は語学の授業から関心をそらすどころか、むしろ、高めることに役立つはずで

ソーシャルディスタンスが求められる現在でさえ、私たちは外国語のクラスの学生と接することができます。それができるのは現在のテクノロジーの進歩のおかげであり、それによって十年前と比べてはるかに多くのことができるようになっています。私たちはこのようなテクノロジーの進歩から目をそらすのではなく、むしろ積極的にそれに適応すべきです。それは、この困難な時代の中で学生の教育に携わる私たち教員の最低限の義務ではないでしょうか。(訳: 森竹 希望)



ルーナ先生とバイル先生の原文の
原稿(それぞれ英語とドイツ語)は、
言語研のHPからご覧いただけます。



言語研ホームページ

コロナ・ストレス・検疫

ドイツから日本へ 不可能を通る旅

ドイツの映画監督ヘルベルト・アハテルンブッシュが手掛けた映画「アトランティック・スイマーズ」に、主人公の一人がテネリフェ島にて、走行中の車から転落するも命拾いするというシーンがある。彼はすぐさま起き上がり、砂浜を駆け抜け、ひとり大西洋に向かって泳いでゆく。彼の最後の言葉はこうだ。「チャンスがなければ、掴み取れ!」

コロナによって世界が一変し、時を同じくして私が九大人文科学研究院の客員教授のポストに就任することとなり、それに向けて動いていた当時、この映画のまさにこの台詞が折に触れて私の頭をよぎった。来日に先立つ2020年初頭、世界はまだ平生と変わらぬ姿を見せていた。私はミュンヘンに生まれ、独文学・比較文学の講師として、これまでにドイツ、日本、ブラジル、スイスと様々な大学で教鞭を執ってきたが、このたび件の研究院から正式に招聘を受け、これに応じることにした。就業許可を得るために必要な留資格認定証明書を取得し、ビザの発給を受け、3月末の飛行機を予約して荷造りを済ませた。だがコロナについてはまったく計算外だった。同じ週のうちに日本政府は、この新型コロナウイルスから国家を守るため、全面的な入国制限を実施した。私たちを九大に招いた小黑教授は、私たちが30年前に北大に勤めていた頃の教え子で、彼は妻と私に冬学期、つまり10月頭から授業を開始してはどうかと提案した。しかしこの提案も実現不可能だということが明らかになった。

私たちは日本が制限を解除した場合に備えて、やるべきことは全て着実にいった。延々とお役所仕事に付き合わされる、神経を磨り減らすようなマラソンが始まった。妻も私も九大の同僚たちのたゆまぬ助力がなければ、きっと頭張り通すことができなかつたらう。一からビザの問題を解決し、滞在許可を得、書類を記入せねばならなかった。しかもその書類というのが書いたそばから旧式になってしまい、また新しく書き直す羽目になった。ここまですべて、日本はいつまで経っても一向にこちらに近づいてこなかった。だが、「チャンスがなければ、掴み取れ!」、日本への到達が不可能に見えれば見えるほど、妻も私も、さらには小黑教授まで、いっそうストイックになりこの骨折りが最後には報われるのかどうか、怪しいものであったにもかかわらず一手を取り合っています粘り強くゴールを目指した。

9月に入って、他に先んじて医師、エンジニア、大学教諭に対して入国制限が解除されるという発表がなされたが、その時点では冬学期の初めに授業を開始することは絶望的だった。しかし、とにもかくにも入国の可能性がようやく見えてきたかくして11月半ばの飛行機を予約したのだが、ミュンヘンを発つ数時間前にコロナ検査を受け、判定を待ち、九大に経費を負担してもらおう旨の証明書にサインし、いかなる措置にも忠実に従うことを約束せねばならなかった。出発当日になってもまだ本当に飛び立つことができるのか判然としなかった。間近に迫った検疫措置についての情報はほとんど得られず、日本領事館に訊ねても、いつもは懇切丁寧に対応してくれる職員たちがほとんど何も答えてくれなかった。



九州大学大学院人文科学研究院
独文学講座教授

ウルリヒ・ヨハネス・バイル

Ulrich Johannes Beil

そこで私たちを待ち受けているものは何なのか?どのホテルが検疫滞在を受け入れてくれるのか?どのタクシーが私たちを運んでくれるのか?せいぜいのところ、ネットに上げられた外国人入国者の報告、あるいは雑多な裏情報や噂話をあてにするほかに、五里霧中の離陸となった。

要するに、絶望とは言わないまでも、全てが不安の中で進行していった。問題なくフライトを終え、東京に着くなり早速当局の庇護下に置かれた。そこで嫌というほどやらされたのが、「馬鹿でもできる」と言い放ってやりたくなるような一連の流れだった。パスポート検査、税関検査、コロナ簡易検査、労働・健康関連の書類検査、日本の在留カード申請、コロナ検査の結果待ち、新しい証明書の発行等々、これら全てにかかった時間は、驚くなかれ、二時間半弱だった。これが有効なシステムの模範であるとはとてもじゃないが信じられないが私たちが八方塞がりになってしまったときは、いつも誰かが手を差し伸べてくれた。例えばある空港職員は私のためにいわゆる「コロナタクシー」を手配してくれた。おかげで私は小黑教授に薦められた隔離ホテルまでたどり着くことができた。

私たちはそれから東京の蒲田でしばしの特別休暇を過ごすこととなった。宿はしっかりとした造りでそこそこ快適だったが、そこで私たちが何かを得ることはほとんどなかった。そこではコロナ感染の疑いのある者として上下階いづれからも隔離された階で過ごさねばならず、ルームサービスも一切なく、普段提供されている朝食は利用できず、ホテル内のレストランで夕食をとることも許されなかった。それでも迎いの華やかで活気溢れる区域の飲食店から食べ物や部屋まで持ち帰ったり、ちょっとした買物に出掛けたりといったことは許されていたが、この検疫をめぐる状況はどこか「ゴドーを待ちながら(ベケット)」に似ている。空間と時間の外で意気消沈し孤立した存在、いつまでも息の詰まった状態——なにしろ何か間違ったことをしていないか、当局に釈明を求められはしないかと絶えず怯えながら生活しているのだ。来る日も来る日も検査を待ち続けたが、しかしそれは一向に訪れなかった。代わりに私たちは始終ぼたぼたにされていた。「信用」されていたともいえるが、明らかに私たちの自主規制に全てが委ねられていた。

この14日間はそれ以前の地獄のような数週間にならぬに比べて実に良い休暇となったが、それが終わるとすぐに私たちはまた「普通」の人間として振る舞うことになった。「普通」の生活に戻り、「普通」のタクシーで空港まで向かい、福岡行き飛行機に乗った。福岡では同僚、学生、隣人たちが何かにつけて手を差し伸べてくれた。彼らがまだ日本に不慣れな私たちに根気強く付き合ってくれたおかげで、万事滞りなく就任を迎えることができた。コロナが奪い去ろうとしたチャンスを、私たちはこうして最善の方法で掴み取ったのである。もちろんそれは幾ばくかの幸運と多くの人々の支えがあってこそだが、以上の顛末はまさに日本の諺「七転び八起き」そのものだったのである。(訳: 長尾 亮太郎)